

「私」の居場所を探して

石原悠子

私はアメリカのテキサス州で生まれ育ち、二三歳で日本に移り住んだ。テキサスではダラスのような大都市ではなく、ラボックという中規模の街に住んでいた。日本人学校などは当然なく、現地校に通っていた。両親は日本人で、私の顔立ちもいわゆるアジア系のそれだ。目鼻立ちのはっきりした子どもたちに囲まれていると、鏡を見ながら「どうして自分の顔はこんなに平らなんだろう」と不思議に思うことがあった。ただ、小さい頃から英語は話していたので、会話では周りと変わらない。むしろ(かなり強めの)テキサス訛り(カウボーイがしゃべるような訛り)が自然に口をついて出た。

一三歳で日本に移住したとき、新しい環境に馴染めるだろうかという不安も

ちろんあった。けれどそれ以上に、「これでようやく自分の居場所が見つかる」という安堵感のようなものがあつたのをはつきり覚えていて。ところが日本に来てみるとその期待感も長くは続かなかつた。見た目の違いは消えたのに、今度は別のところで私はやはり「どこか違う」存在だった。

性格は内向的で、アメリカのアウトゴーイングな文化より日本のほうが肌に合っているはずだった。けれど、周りが当たり前にしていることが、私には当たり前ではなかった。たとえば、女の子たちがみんな連れ立ってトイレに行く。なぜトイレにまで一緒に行かなければいけないのか、どうしても理解できなかった。でも、新しい環境に必死で馴染もうとし

ていた私は、理解できないのはそれとして、「ここではこれが普通なのだ」と自分を納得させようとしていた。

あるとき、友人たちと近所のお寺に遊びに行った。何気なく山門の敷居を踏んで入った。すると友人が「踏んじゃいけないんだよ!」と言う。みんなが当たり前知っていることを、自分だけが知らない。そのことが恥ずかしかった。そうした小さな出来事が積み重なり、「日本もまた自分の居場所ではないのか」という葛藤が芽生えていった。

こういう幼少期を過ごした私は、物心ついた頃から常に「私は何者なのか」という問いを抱いていた。私はアメリカ人なのか、それとも日本人なのか。みんなは自分が何者かを知っているのに、私に

はそれがわからない。どつちつかずの自分に困惑し、長いあいだアイデンティティの不安に悩まされてきた。「悩まされてきた」と書くとは過去の話のようだが、じつはこの不安が解消されたのはごく最近のこと、人生の大半を私は「自分が何者か分からない」という感覚とともに過ごしてきたのである。哲学を志すことになったのも、こうした葛藤を解く手がかりが哲学にあると確信していたからだ。逆に言えば、哲学を学ぶ以外に自分の進む道は見いだせない、とさえ思っていた。ここでは、京都学派の哲学者・上田閑照(一九二六―二〇一九)の「自己」をめぐる思索を手がかりに、私がどのようにしてこの不安から抜け出していったのかを綴ってみた。

京都学派とは、大正・昭和期に西田幾多郎や田辺元らを中心に京都で活躍した哲学者たちの系譜を指す。とりわけ西田は「純粹経験」「自覚」「場所」など独自の言葉を残し、その後もその思想は後継者たちによってさまざまに展開されていた。上田閑照は西田の学統に連なる西

谷啓治の弟子で、ドイツのマルブルク大学で博士の学位を取得したのち国内外で講義や講演を行い、広く活躍した思想家である。

西田幾多郎の文章は、批評家の小林秀雄が「日本語では書かれておらず、もちろん外国語でも書かれてはいない」と評したほど難解だといわれる(「学者と官僚」、一九三九)。それに比べると、上田の文章も決してやさしくはないが、西田よりは読み手を強く意識して書かれている。抽象的な議論が多いのに、体にすつと入ってくるような手触りがある。私が上田に親しみを感じてきた理由の一つも、そこにある。

私は筑波大学の学位論文で西田について書いたとき、「母親としての自覚」という日常的な言い方から、西田の「自覚」概念を考えようとした。しかし指導教員から「西田の言う自覚は、そういう意味なのか」と疑問を投げかけられた。哲学用語を安易に日常語に置き換えてはいけないのだ——当時はそう思った。だが、あの直感が完全に間違っていたとも

思えない。「自覚」という言葉は、哲学用語になる以前にそれ自体の意味を持っている。日常の「自覚」と哲学の「自覚」のあいだに、何らかの連続性を見いだそうとするのは自然だろう。

実際、上田は西田の「自覚」を説明する際に、「父親としての自覚」「教師としての自覚」といった身近な例を用いている。抽象度の高い議論を、日常の具体的な場面に翻訳しながら、しかも翻訳によって安易な単純化が起きないように配慮する。その難しい技が上田の文章にはある。

上田の著作のなかでも、私がとくに愛読してきたのは岩波新書の『私とは何か』(二〇〇〇)である。そこで上田は「自覚」と「自意識」を区別している。英語には self-consciousness や self-awareness という言葉があるが、それらには日本語の「自覚」と「自意識」のニュアンスの違いが入ってこない。自己意識は単純に言うところ「自己が自己である」「私が私である」という意識のことであるが、英語では——少なくとも言葉の上では——そ

れが自己の同一性ということ以上には考えられていない。それに対して日本語では、自己の同一性が「自覚」ということとしても考えられるし「自意識」ということとしても考えられる、と区別がされていることは面白い。では「自覚」と「自意識」の違いは何なのか。

私たちは日頃、「自意識」過剰だが「自覚」は足りていない、と上田は指摘する。どうということか。自意識過剰とは、他人が自分をどう見ているのかということとを過剰に意識したり、自己の内面に必要以上に意識が向いてしまつて、「私は私である」ということに固執してしまつて身動きが取れなくなっている状態である。他方で「自覚が足りない」と言われるとき、欠けているのは、自分が会社や社会といった環境のなかに属し、その関係のなかで自分の行動が一定程度制限されるという理解である。言い換えれば、自己が自分の取り巻く環境へと十分に開かれていない、ということである。

しかし、外に開かれていればそれで良い、という単純な話でもない。ドアが開

きつばなしだと、内と外の区別が成り立たないように、自己が外界に開きつばなしだと、今度は「自己」と「外界」の境界が曖昧になる。上田はここで自己には二つの動きが必要だと言う。「自己」から出る(外に出る)動きと、「自己」へと返る(内に戻る)動き。自己とはこの往復運動そのものであり、本来そのように動いている。これが上田の自己論の基本的な見取り図である。

ただし、この運動はいつもスムーズに働くわけではない。私たちは往々にして自分の殻にこもり、半開きのまま外へ出てたつもりになる。たとえば対話の場面で、私たちはどれほど相手の声をそのまま聞いているだろうか。「この人はこういう人だから、きつとこう言うだろう」と推測し、相手の像をこちらで作つて、それで分かつたつもりになる。それでは自己は本当の意味で外へ出ていない。閉じた自己のまま、擬似的な「外」に触れているだけだ。

本当の意味で他者と出会うとは、いったん自分の立場を留保し、相手の声に無

心に耳を傾けることだ。「私は私である」という自意識を破つて、相手へ向かうことだと言ってもよい。

上田は、自意識の自我をふと忘れる瞬間を「極小規模の解脱」あるいは「擬似解脱」と呼び、日常のなかに潜んでいる擬似解脱体験によって自己のバランスが保たれていると言う。忙しい日に道端に咲く花にふと目を奪われるとき、そこに小さな余白が生まれ、呼吸が戻ってくる。あるいは、子育てはそれに似た体験の連続かもしれない。母親になって私が強く感じるのは、「思いどおりにいかないことを受け入れる」ことの大切さである。「こう育つてほしい」という将来像はもちろん、日々の「今日は何時にお風呂に入ろう」といった予定さえ、思ったとおりに進まない。目の前の子どもが、今なにを必要とし、なにを望んでいるのか、そのことをじかに受けとめて柔軟に動く。そういう時間のなかで「私は私である」という頑なな自意識は否応なく崩されていく。母親業はある意味で自我の殻を突破する修行のようである。

先ほど「母親としての自覚」という例

を挙げたが、この自覚は、家庭や子どもに対して自己が開かれることで形成されていく。母親になりたての頃、私は「こうありたい」という母親像と現実の自分のズレに苦しんだ。今振り返れば、それは自分が自分のなかに閉じたまま、イメージに縛られていたからだろう。「母親とはこうあるべきだ」という像が先行し、その像にがんじがらめになっていた。すると自意識ばかりが強まり、肝心の子どもの向き合えなくなる。母親としての自覚が芽生えるのは、「私は母親である」と固く握りしめる自意識によってではなく、自分の置かれている状況に自己を開き、目の前の子どもに一心に向き合うときだ。

最後に、上田は「自己から出る自由」と「自己へと返る自由」について語っている。母親像に縛られることは、自己が不自由になることだ。自我の殻から出られない不自由さである。自由に自己から出て、自由に自己へ戻ってこられる。この自在さこそが「真の自己」だと上田は

いう。

私はアメリカ人なのか、日本人なのか。上田の自己論を通して、私がいま暫定的に得た結論は、本当の私は「どちらでもない」ということだ。自己は「私は○○である」と一つの型にはめて固定されるものではなく、外界との関わりの中で形成されつづけるものだからである。

ふつう「私は日本人である」と言うとき、その後で「そしてそれ以外ではありえない」という固執が働きやすい。だが上田の言う「自覚」に照らせば、自己の同一性とは、むしろ「私はアメリカ人である」こともできるし、「私は日本人である」こともできる、という自在さとして現れる。同じように私は「母親である」こともできる。この自在さこそが「私」なのである。

一つの確固たるアイデンティティを求めていた私に、上田の自己論はこう言ってくれたように思う。自己のアイデンティティは「ある」のではなく、むしろ「なす」。英語で play a role は「役を演じる」という意味だが、自己のアイデンテ

ィティはまさに「遊ぶ」ものである。私には日本人のアイデンティティを play = 遊ぶこともできるし、アメリカ人のアイデンティティを play = 遊ぶこともできる。この自在さを手にいれると、人生は楽しくなる。

いま私は、自己の哲学から、遊びの哲学へと歩みを進めている。

(いしはらゆうこ・日本哲学)